

雲南市三刀屋町「高窪炭鉱」に関する資料

三刀屋町誌に基づく「高窪炭鉱」関係の記述を元にしたメモです。

戦争中、韓国人労働者多数が働いた雲南市三刀屋町の高窪炭鉱・・・

かつて、三刀屋町の高窪地内にあった高窪炭鉱は、明治時代に発掘されたが、経営者が次々変せんし、大正中期に一旦、閉山となった。その後、アジア太平洋戦争へ向かう昭和16（1941）年に再開された。そして、戦争の拡大で石炭需要が増加し、設備の拡大や労働者も増員されていった。このため、九州四国方面から炭鉱労働者が集まり、最盛期には労働者200人の内、韓国人は30人ほどいたという。家族連れも多く、地域人口は400人も増加し、学校の生徒数も倍増したため先生も増員されたという。炭鉱は小規模だったが、国鉄木次駅まで石炭を搬送していた。当時、食糧事情や労働者の質も悪く、喧嘩や賭博などで日々、問題が起こり、戦後、出炭量も年々減少していく中、昭和26（1951）年には閉山となった。今後、この炭鉱を調査したいと考えています。



当時の採掘坑内入口附近と人夫の写真（森山英提供）
（明治大正期頃の高窪炭鉱）

日本韓国の市民友好の会

代 表 江 角 秀 人

住 所 : 松江市学園二丁目3-27-810

電 話 : 090-9733-0910

（1982年7月）より

高窪炭鉱

高窪炭鉱は、明治二十二年能義郡広瀬の高塚義右工門が採掘を始めたのが発端であった。

開坑当時は技術も幼稚で、採炭は大中小のツルハシを使用、露天掘りが主であった。水田の耕土を除けば直ちに炭層に当たり、採掘は比較的容易であったが、交通の便に恵まれず、搬出は不便であって、主として古城、下熊谷、木次の里方、山方方面からの役馬や荷車等にたよるほかなく、納人先の木次町川西、大原郡前原両製絲工場へ送った。平田製絲や大津製絲への運搬は、高窪の西谷地区（現在は出雲市上島町）から和久輪へいたる道路を新設、和久輪まで荷車で搬出、それより斐伊川の舟便によるしか方法がなかった。また一面では地元人夫により、現場から伊豆まで山道を人力によって運搬もした。（運賃は六十キログラム入り一俵四銭）最盛期には地元人夫の他、遠く九州方面よりの従業者も多く、地区の民



当時の採掘坑内入口附近と人夫の写真（森山英提供）

いては経営上の採算がとれず、経営者も幾人となく変わっていることもそのためであるとのこと。当時採掘現場の坑内の照明は灯芯を用い、種油を燃料とし、そのうえ換気も悪く、坑内にガスが充満して灯が消えると、人夫は坑外に出て外気を吸い、再び入坑作業をつづけるといふ具合であった。坑内よりの石炭の搬出は、箆（おこし）に入れ肩

高窪炭坑の再開

日華事変につづいて、昭和十六年十二月太平洋戦争に突入すると、石炭の需要が急増したため、大正中ごろ一旦休止した

に担いで坑外に出し、それを撰炭し、一俵十六貫に俵詰めをした。坑内の燃料は前述の通りであったから、充満したガスと煙のため、坑夫を退いた後も二、三年間は、黒色の炭が出る始末であったという。またガスのためと坑内落盤事故のため、森山重三郎、高橋久三、森山富三の三人は不幸犠牲者となった。作業は一日三交代で、人夫賃は二五銭、一日二回働く者は五〇銭となった。女は水引き桶で坑内の水汲み作業をするのが主な仕事で、賃金は男の七割であった。（明治三十五年頃の豆腐一丁は二銭、米一升一〇〜一二銭の相場であった）なお、この炭坑は、明治二十七年六月二十日付の山陰新聞によると、飯石郡一宮村大字高窪小字下アケその他一一四ヶ所を認可すと掲載され、明治二十七年大阪鉱山監督署から試掘認可が下りていることがわかる。高窪炭鉱は前述のように諸種の事情で経営者が時どき変わっているが、詳細については資料がなくなっているし、大正の中ごろまでつづいたことは事実のように、一旦休止となるが、昭和期に入り再び脚光を浴びる時代が訪れるが、そのことについては、本章第二節で後述する。

高窪炭坑は、再び時代の要請で再開された。炭質も良く出炭量も多く、昭和十九年には、戦時色にかられ島根報国炭坑と改称、海軍用達日立安来工場の発注にも活躍、国策に応じた。このころはこの炭坑の最盛期ともいえるべく、一日の産出量は一二〇トンに達し（一トン当たり四巴）、従業者も地元や遠く県外からの労働者も多数あり、一時は二〇名くらいを数え、別仕立の宿舍も建ち並び、商店、飲食店もあったという殷賑さだったと古老は伝える（この宿舍の基礎コンクリート跡など現在も残っている）。当時搬出のためには、現地より木次駅の近くの貨車積込場までの間に索道を建設し、ケーブルによって（このための変電所跡も現存）搬出したので、明治大正時代の殆んど人力による搬出に比し、能率的であった。

しかし、時代の変遷と出炭量の減少に伴って、この炭坑は昭和二十七年三月まで続き、高窪はもとより、本町にとっても有力な産業で、経済に与える影響は大きかったが、時代の変遷と出炭量の減少に伴って遂に閉山の止むなきに至った。